



1948年、北大YMCA汝羊寮にアメリカ人一家の訪問があった。ディーン・リーパー夫妻と離乳中の男児で、YMCA協力主事としての学生YMCA活動の一環だった。それから6年、青函連絡船「洞爺丸」の遭難者の中に彼の名があった。自らの救命胴衣を日本女性に与えて殉難したと報じられた。後年七重浜を訪れた愛娘が、砂を叩いて「お父さん！なぜ日本人のために死んでしまったの？」と泣き崩れたという。

2007年外国人初の広島平和文化センター理事長として、スティーブ・リーパーが任命された。被爆体験を語り継ぐため、米国50州101都市で「原爆展」を開催して、「人類の未来への警鐘」としてアメリカ人に受け入れられている。核のない世界への道筋を示す「ヒロシマ・ナガサキ議定書」を国連に提出する署名運動を続けている。この大きな流れがオバマ大統領のプラハでの核兵器廃絶の演説を引き出したと言っても過言ではない。スティーブは母国の「戦争文化」に厳しい目を向け、日本からの「平和文化」の構築に情熱を燃やしている。「自己を犠牲にしても、人のため世界のために何かをする方が大事だ」という教えは、私達家族のなかに残っている」と語っている。驚いたことに、このスティーブ・リーパーこそ、あの61年前に北大学Y食堂で会食したディーンの長男、その人だった。

1920年11月12日、アメリカ合衆国イリノイ州のファーマントンの大きなリーパー農場で3人兄弟の長男として生まれ百キロメートル四方もある大農場で伸び伸びと育ち、高校では成績抜群で飛び級をした程でした。1938年、父の後を継いで農場経営を志してイリノイ大学農学部に入學、大学4年の時太平洋戦争が起きました。その半年後卒業したディーンは学生伝道団の主事に選ばれ、アメリカ中の大学の学生たちに神の教えを説いて回りました。1942年にはシアトル市にあるワシントン大学国際会館の主事になって、アジアから来た留学生たちの世話をする仕事に従事しました。戦争が烈しくなって、1944年23歳のディーンもアメリカ海軍に言語将校として召集になりました。間もなく除隊になりエール大学に入り中国語の勉強を始めます。今度は陸軍から召集令状が届き、軍の命令でミシガン大学の日本語学校に送られました。初めは中国行きを願っていたのに、何故か日本伝道が召命と思う様になりました。

丁度この頃、24歳のディーンは22歳のミッジとミシガン大学のクリスチャンの集まりで知り合い婚約しました。1945年終戦の年です。中尉になっていたディーンは占領軍の一員として日本進駐を強く勧められましたが「私は戦勝国の軍人として日本の土をふみたくないのです。日本人の友として日本を訪れることを希望します。」とはっきり断っていました。1947年にはスティーブが生まれました。

1948年、日本へのチャンスが訪れたのです。引揚者援助庁の斎藤惣一長官がアメリカYMCA同盟の古い友人を通じて第一級の、そして日本語を話せる人として全米の青年たちの中から選んだのがディーンだったのです。日本のキリスト教会の再建という仕事を与えられた彼は1948年12月28日、米軍のジェネラル・ゴルドン号で横浜に着きました。

初めての日本です。ミッジと長男スティーブ、日本に来る途中のハワイで生まれた次男ディヴィットも一緒でした。来日すると早速に「わたしたちの使命は、信仰の大きな喜びを人々に伝えることです。キリストがどんなお方であるかを伝えるなら、その人がどんな生活をしていても、彼の人生を根底から変えることが可能です。」「どんな場合でも、どんなところにおいても、クリスチャンに絶望はない」「わたしをどこにでも呼んでください。わたしは、どこにでも行きます。」と日本全国の大学を訪問し、個人の家庭集会にも出席していました。二人の子供の育児の傍ら、ミッジ夫人も一緒になって日本の学生達をエール大学へ送り出したり、スリランカやインドネシアでの国際会議へ出席する道を開いたり日本のために、なりふりかまわず働きました。また日本を愛し、日本のしきたりを尊重して積極的に学生達とも交わり、誰にも好かれる好青年夫妻でした。

リーパー一家は5年を日本で過ごした後、日本YMCAから1年半の休暇をもらって、一時アメリカに帰ることになりました。この間にディーンはエール大学に戻って、牧師になる勉強をするため1953年2月に帰米しました。帰米中も日本からの留学生のため自分の給料で援助するなど目に見えない働きをしていました。1954年9月5日、1年半の休暇を終えたディーン一家は日本に帰って来ました。荷物をとく暇もなく、ディーンは22日北海道へ出張に行き札幌や留萌で人に会い、大学を訪ね、9月26日の午後、離道の予定でした。

1954年9月26日、洞爺丸は大型台風の中を乗客、乗組員1,314人を乗せて函館港を出港、青森に向かいました。しかし台風に巻き込まれて転覆し1,200人近くの人々が亡くなりました。この中にアメリカ人宣教師ディーン・リーパーの名がありました。彼は札幌から夜行列車で函館に着いて直ぐに、次の訪問地仙台に向かうべき先を急いで洞爺丸に乗船しました。遭難の時「乗客が叫び泣いている最中、彼は“鎮まるように”と呼びかけ、女、子どもに手を貸して救命具をつけているのを見たのが最後だった」と同室だった生還者のドナルド・オース宣教師は語っています。また当時の新聞は「北海に散った外人宣教師『救命具は女子供に一使徒にふさわしい最期』」の記事の中で、33歳の若さで6歳を頭に幼い3児と妊娠中のミッジ夫人を遺したまま、伝道の途中で北海に散ったディーンの業績を讃えた上で、ミッジ夫人の言葉として「子供達が大きくなったら、日本に送り、父の志を継がせませう」と帰米の飛行機で泣き崩れたことを報道しています。(1954.10.9付日本経済新聞)

1949年以来の日本人の親友、鈴木栄吉さんは「リーパー君に深く接した人は、例外なくクリスチャンとしての信仰を生涯失わなかったのです」「リーパー君は愛のために自分の命を捨てました。キリスト教の信仰は、愛を通さなければ、外にあらわせないからです。彼は、神が生きておられる事実を、神が愛であることを、自分の命を捨てて証明してくれました」「新聞を読んで、その人がリーパー君だと知らされても、不思議な気はしなかったですよ。彼なら当然そうするだろう、としか思えなかったのです」と語っています。

スティーブ・リーパーは1947年、米国イリノイ州出身。1985年英語講師として来日以来、翻訳、通訳業をしつつ、核兵器廃絶運動に取り組み、平和市長会議米国代表を経て、2007年、広島平和文化センターの理事長に外国人として初めて就任しました。他方、ディーン・リーパーの長男として、乳児期より5年間、日本宣教の任務を帯びた父母と共に日本に住み、6歳で洞爺丸遭難事故により父を失い弟妹3人とともに帰米しました。「父はよく泳げましたし、事故の第一報は『行方不明』の連絡でした。きっと助かったものと確信していました。」と当時を追憶しています。「大学卒業後カリフォルニアで働きはじめ、今は広島に住んで三つの会社を経営しています。」と日本での取材に答えている。取材者の感想は、父親ゆずりの青い目をした180センチの紳士でした。

彼は長年にわたる平和推進活動及び(財)広島平和文化センター理事長としての平和市長会議や全米原爆展、国際交流・協力事業等へのリーダーシップが評価され、2009年2月13日、「平成20年度アカデミア賞 国際文化部門賞」を、社団法人全国日本学士会(本部・京都市)より贈られました。

彼は「原爆の戦争犯罪」性について語ります。「初めて広島を訪れた時、わたしは原爆のことなど考えもしませんでした。心配も、気にも留めてもいませんでした」。AFP通信とのインタビューでスティーブは語りました。「戦争で敵を殺すのは当然だし、原爆についても、敵を大量に殺すための大型爆弾のどこが問題なんだといった認識しかありませんでした」と、そんなスティーブの考えを180度変えたのは、被爆者らの苦しみを描いた「原爆の子」という1冊の本でした。彼は初めて、原爆を落とされた側に与えた被害の大きさに想いが及ぶようになったといいます。「わたしも今では、原爆は完全に戦争犯罪だと考えています」と。現在米国50州101都市で「原爆展」を開催する運動を進めている。これに対する米国での反応はさまざまだといいます。70代以上の世代が未だに日本に対して割り切れない感情を持ち、日本の「戦争被害」について聞くのを嫌がる半面、若い世代には純粹に原爆の話にショックを受け、涙を流す人も多いという。また、同行した被爆者に対し、米国を代表して謝罪したり何かできることはないかと尋ねる人もいるといいます。

スティーブは「原爆展」の目指すものとして「米国を責めることでもなく、人類の未来への警鐘を鳴らすためだと強調しています」といいます。また彼は、核兵器の拡散防止だけでなく、“核の廃絶”というテーマを、米大統領選での注目点として強調してきました。「核兵器は単なる兵器ではなく、われわれ人類を破滅させる兵器なのです。われわれは核兵器、ひいては全ての戦争暴力をコントロールする方法を学ばなければなりません。それが広島メッセージなのです」といいます。

さらに彼は、地球温暖化問題の解決に向けた道筋を示した「京都議定書」にヒントを得て、核兵器廃絶の道筋を示す国際協定「ヒロシマ・ナガサキ議定書」を提唱。国連(UN)総会での採択を目指し2009年10月までに提出したいとしています。

リーパー一家のその後(省略)

(東京目黒クラブ:2010年4月例会卓話)